

エッセイ

私の人生

徳増 公明

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
 الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ
 الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
 مَلِكِ يَوْمِ الدِّينِ
 إِيَّاكَ نَعْبُدُ وَإِيَّاكَ نَسْتَعِينُ
 اهْدِنَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ
 صِرَاطَ الَّذِينَ أَنْعَمْتَ عَلَيْهِمْ
 غَيْرِ الْمَغْضُوبِ عَلَيْهِمْ وَلَا الضَّالِّينَ

(クルアーン第一章のアラビア語と和訳)

- 1 慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。
- 2 万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ、
- 3 慈悲あまねく慈愛深き御方、
- 4 最後の審きの日の主宰者に。
- 5 わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。
- 6 わたしたちを正しい道に導きたまえ、
- 7 あなたが御恵みを下された人々の道へ、
あなたの御怒りを買っていない人びと、また踏み迷ってもいない人びと（の道へ）。

はじめに

人は生まれてから様々な局面に出会い、喜怒哀楽して過ごしている。

私も高齢化社会に相応しく、82年間の長い間を生きてきた。何も残せずこの世を去るのは残念に思う今日この頃である。そこで生きた証にこの本「私の人生」を出版して子孫に残すことを考えた。少しは彼らの生き方の参考になることを期待して。

構成は下記の目次のように、過ごした時代を追って原稿を作成した。

また、新たに講演会原稿、エッセイ、巻頭言（日本ムスリム協会会報より）も載せた。

尚、以前に出版した関連本「だるまへの願い」と類似した内容、写真を活用させていただいた。

この本の読者が、小生という人間が現世で存在していたことを知ってくれたら有難いと思う。

2025年5月 徳増公明

目 次

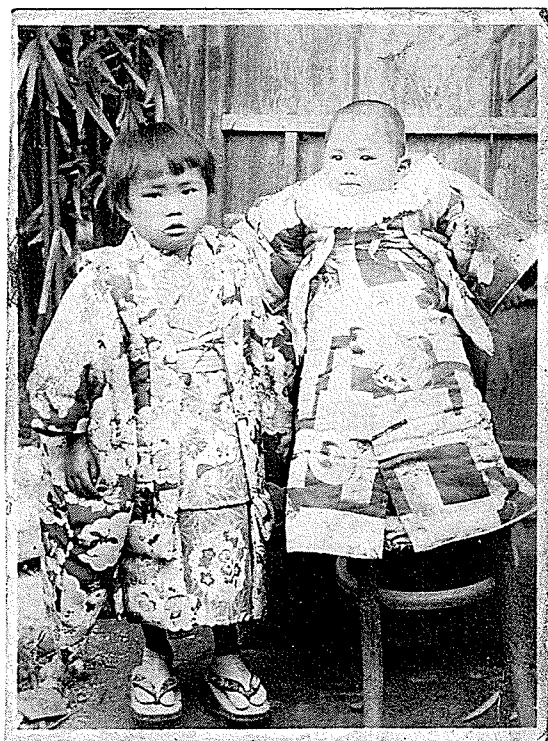
第一章 私の人生（時代別）	7	6. 核兵器禁止条約に思う	78
1. 幼年期から村櫛小学校時代	8	7. 利己主義の抑制	79
2. 村櫛中学校時代	11	8. 少子化問題	80
3. 浜松北高等学校時代	13	9. 中庸な言動	81
4. 拓殖大学時代	14	10. 日本社会に身近になったイスラーム	82
5. カイロ留学時代	16	11. カアバ聖殿において	83
6. アラビア石油時代	19	12. 羅漢さんとイスラーム	84
7. アラビア石油退職後	22	13. G20諸宗教フォーラム2019京都に 参加して思うこと	85
8. 高齢期時代	34	14. 東京オリンピック・パラリンピックを迎えるに当たり	86
第二章 講演会原稿	39	15. 新型コロナウイルスの試練に思う	87
第三章 エッセイ	47	16. 核兵器の廃絶にむけて	88
1. 故アントニオ猪木氏に感謝	48	第五章 ジュリイ（Julie）との文通	91
2. ファイサル国王賞受賞	59		
3. 濱田明夫氏を偲んで	63		
4. G7広島サミット後の期待と課題	68		
第四章 巻頭言（日本ムスリム協会会報より）	71		
1. 宗教対話	73		
2. 会館活動のスタートに向けて	74		
3. 自然は美しい	75		
4. 日本イスラーム文化交流会館設立記念式典を迎えて	76		
5. 対話で平和な年に	77		

第一章

私の人生（時代別）

1. 幼年期から村櫛小学校時代

私は浜名湖の湖畔に在った静岡県浜名郡村櫛村（現在の静岡県浜松市中央区村櫛町）の3千人程の小さな村で7人兄弟の4男として生まれた。



赤ん坊の時、3歳のゆき子姉と

父徳増清成は百姓でいくつかの田畑を持ち毎日車に牛を引かせて行っていた。食べ盛りの多くの子供を持っていたが、田畑から収穫した農作物で自給自足の生活をしていた。子供達は季節の農作物を腹いっぱい食べて喜んでた。サツマイモが取れば干し芋にして、落花生が取れば鍋で炒りからを指で割って食べていた。果物も柿や蜜柑を熟した時に食べていた。今ではどこでも売っているバナナ等の輸入品は、政府の外貨が不足していて食べられなかった。

また、父は向学心に燃えていたようで東京に出て英語を学んだこともあり、その後、気賀にあった教員養成学校に通っていた。英語に関心があり、テキストを手にしてラジオに耳を傾けているのをよく見た。だが当時は親の職業を継ぐのが当たり前で選択肢がなかったようだ。また、父は人望があったようで村櫛の区長をしていたが、60歳の半ば、脳卒中で他界した。

一方、母親の徳増みよゑは、近所の小松家から父の妻として嫁いできて、7人の子供を産み育てるのに苦労したことだろう。特に子供たちが中学を卒業して浜松の高校に通った時期は朝早く起きて朝食と弁当作りに忙しく、土間の釜土の前でコックリ、コックリして薪を入れているのを見た。私たちはそれを当たり前のことと思って手伝いもしなかった。日中、母は洗濯を終えると、田

畑の仕事に出かけて行き、農作業に専念した。丈夫な体で、90歳近くまで子供の世話をして亡くなった。

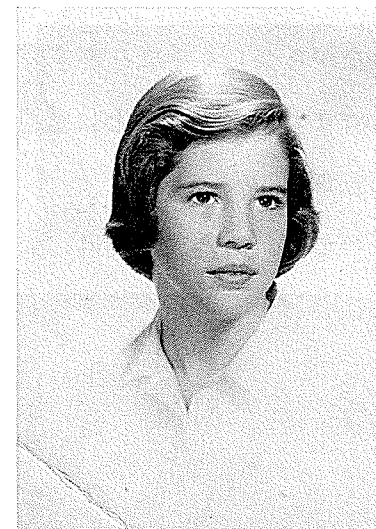
私を苦勞して育ててくれた両親に感謝している。



祖母、両親、兄弟たち(家の前で)

2. 村櫛中学校時代

私にとって人生を大きく転換させることになったのは、中学時代の英語の先生の提案であった。英語を学ぶために国際郵便友の会に入ることを薦められた。クラスで数人が手を上げ加入するとアメリカ



ジュリー・ビドル(10歳当時)

人の子供5, 6名から私宛に手紙が届いて驚いた。困ったことに返事を書く英語力がなく、旺文社が出版した「英文の書き方」を購入し、本の文章を抜き書きして返事を出した。返事はすぐ届いたが、その返事を出すことに困惑して文通は諦めかけていた。ところが、ニュージャージー州の10歳の少女 Julie Biddle からは返事をするまで手紙が届いた。仕方なしに本の英文を使い、自作の英文を混ぜあわて返事し、何とか文通は続いた。後で分かったことだが、そのちぐはぐな文章が Julie にとって面白かったとのこと。こうしたこともあったが、それ以後60年以上の現在まで文通が続いている。私はそれ以後、現在まで英和、和英辞典を引

きながら楽しく手紙を書き続けている。そして国境を越えた友情は育まれ、様々なことに意見交換をするまでになった。(参照：第五章 Julie との文通)



平成16年5月2日 昭和31年度卒村柳中学校還暦記念同窓会 於カリアック

中学還暦同窓会。中央の3人は中学3年担当だった先生方
(2004年5月2日、村柳町のカリアック福利研修センター)

3. 浜松北高等学校時代

浜松の北高等学校は進学校であった。自分の成績は良くないし、学費もかかるし、実家の農業をするつもりだった。ところが高校3年の暑い夏、名古屋の東京銀行支店長、原田氏が黒塗りの外車で突然我が家にやって来たので驚いた。父が対応し、祖母が団扇で扇いで歓迎した。

原田氏曰く「私がニューヨークの東京銀行に勤務していた時、現地取締役のビドルさんとは親しく、彼から依頼されてやって来た。お宅の息子さんの公明さんを大学へ行かせて欲しい。学費はビドルさんが負担する」とのこと。大學進学を考えていなかったし、試験に合格する自信がなかったが父が返事した。「せっかくの好意に報いよう。親友にアフガニスタンの日本大使館武官として任務を終え帰国し、今、拓殖大学の講師をしている斎藤積平がいるので彼に頼んでみよう」。

4. 拓殖大学時代

拓殖大学の入学試験前日、東京都国立市にある斎藤先生を父と尋ねた。先生宅に宿泊して、翌日地下鉄茗荷谷近くにある拓殖大学に到着した。試験は良い成績で合格でき、授業料が免除される特待生として入学できた。

斎藤先生はアフガニスタンに勤務していた時、アフガニスタンの国教イスラームに関心を持ち、入信していた。帰国後、聖典クルアーンという言葉であるアラビア語の夜間講座を開き、アラビア語が外国語選択科目の一つに追加された。私は先生の勧めでアラビア語を選択し、同期の学友と共にアラビア語同好会(後のアラビア研究会)を設立、日本で初めてアラビア語劇「塩(ミルハ)」を実施した。アラビア語の先生は駐日エジプト大使館の外交官ダルデリー氏と、日本とエジプト間の交換留学生で東大の大学院に在学したオマル氏であった。彼らと親しくなり、彼らの生活の基盤がイスラームであることを知り、井筒先生のクルアーン和訳を読んだりして、イスラームに関心を持ち、代々木上原にあるトルコ回教寺院で入信した。大学3年の時、エジプト政府の官費留学の公募があり、アラビア語を学ぶ5人の仲間と一緒に応募して運

よく受かった。

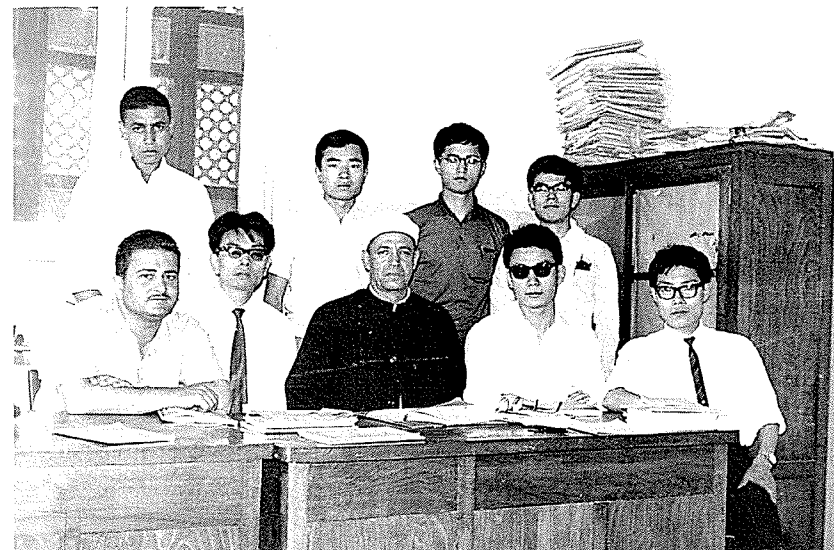


拓大の紅陵祭で行われたアラビア語劇のスタッフ

5. カイロ留学時代

カイロ空港に到着するとアズハル日本人留学生の先輩たちが出迎えてくれた。そのまま学生寮に直行した。その寮は40棟ありマデーナ・トルバウス・イスラミーヤ (Islamic Mission City) と呼ばれていて世界中からやって来た男性の子供から大人まで約4000人が住んでいた。

その近くに約1000年の歴史を持つイスラーム学で有名なアズハル大学がある。大学の授業はすべてアラビア語なのでアラビア語を上達させる必要があった。アズハルの事務所から年配のシェイクが私たちの6人の大部屋に来てくれて大学に入るためにアラビア語を初歩から教えてくれた。数年かかってやっとアラビア語にも慣れ、私はイスラーム法学部に入ることができた。それでも授業についていくのに大変で、同級生のエジプト人やマルデブ人に家まで来てもらい復習を助けてもらった。



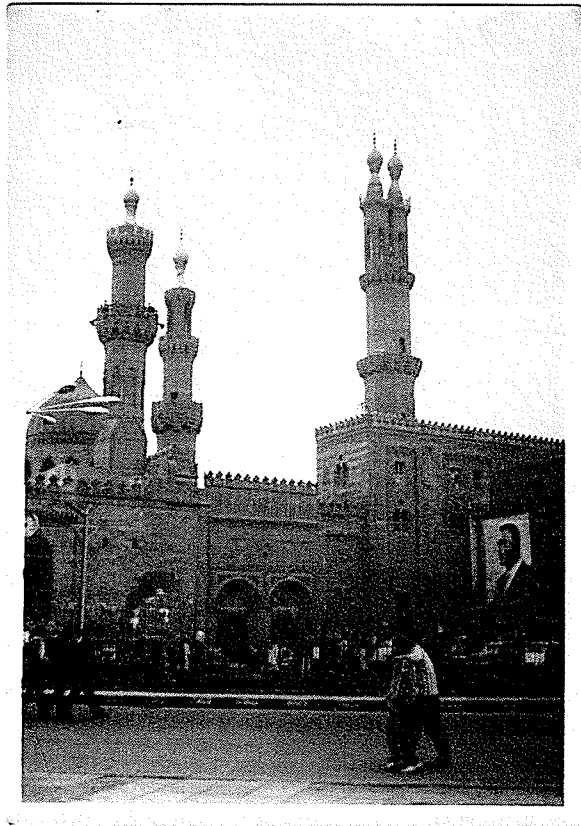
アズハル事務所でシェイクからアラビア語とクルアーンを学ぶ

試験は厳しく口頭試問と筆記試験がある。

特に苦労したのはクルアーンの暗記である。一字一句間違えても不合格。来年までの宿題とされる。毎年多数の学生が落第する。従って一年の時、同級生だった学生が4年後、卒業できるのは

約4分の1の人数になる。試験後、大学の掲示板に公表され、二年間失敗すると退学となるので恐る、恐る見に行った。私が卒業した時、アズハル大学を卒業した日本人は歴史学科の飯森嘉助氏、イスラーム法学科の武藤英臣氏だけだった。イスラーム法学

科を卒業した人達は自国に帰って裁判官になる場合が多いとのことで、私が石油会社に入ることを言ったら、なぜ会社に入るのかと学友から問われた。



アズハル・モスク(カイロ)

6. アラビア石油時代

アズハル卒業後の職業について、拓殖大学とアズハル留学での先輩であり、アラビア石油に勤めていた濱田明夫氏に相談したら、幸いに彼が会社の幹部を説得してアラビア石油に入社することができた。

当時日本は高度成長期を迎え石油を必要としていた。1958年、日本初の海外石油資源開発会社・アラビア石油が設立された。社長に山下太郎、会長に当時の経団連会長の石坂泰三、財界人の桜田武、小林中の各氏を発起人として、電力、鉄鋼等、日本の代表的企業40社が名を連ねた。石油開発の地域はサウジアラビアとクウェイトの中立地帯の沖合であった。幸運にも一号井で原油を発見しカフジ油田と名付けられた。1976年に入社し、総務部に配属され会社設立から石油開発、日本までの輸送等について学んだ。カフジには約2000人の従業員(内、日本人の幹部、技術者、従業員がいた)。日本人学校の先生方、クリニックの医師もいて従業員が困らないような環境を備えていた。

また年4回の取締役会議が東京で2回、カフジ、ロンドンで各一回開催された。取締役としてサウジアラビア国とクウェイト国

から各2名の石油省幹部が参加した。私は東京での取締役会議の時にはサウジアラビア石油官房長官のアブドルラハマーン氏（のちの次官）の世話役を行った。彼は度々日本へ来るうちに日本人が好きになった。利権延長の際には様々な提案をしてくれたが日本側（日本政府）が原油提供の見返りに同意してくれなかったのが失敗した。それはアラビア石油のみならず日本国にとっても大変な損失で、残念なことであった。その彼が、湾岸戦争の時に多国籍軍がイラクに対して戦争を開始したことを伝えてくれたのだった。その情報を知ったカフジに残留していた日本人47人は用意したシェルターに避難して助かったのだ。



コーヒーを飲む(我が家)

1982年、本社からリヤードにあるサウジアラビア駐在代表事務所へ赴任した。主な仕事は本社の指示に従って石油省との交渉、サウジ政府へ提出する書類のアラビア語のチェック、現地の情報収集であった。また聖地マッカ（メッカ）とマデーナが飛行機で数時間の距離にあるのでよく行った。ムスリムにとって大切なハッジ（巡礼）をすることができた。



ハッジを行うため、家族に見送られてマッカに向けて出発
(リヤードのTAICコンパウンドの自宅前、1985年)

7. アラビア石油退職後

私は年金額の問題で60歳の定年を65歳に延長してもらい、会社を退職した。

〈日本ムスリム協会の活動〉

会社を退職すると毎日が自分の時間になり、いかに有意義に楽しく過ごすかと言う嬉しい問題が生じた。健康管理を第1に考えたのは言うまでもない。そして、日本ムスリム協会の活動に尽くそうと思うようになった。2000年、会長に選出されて毎日協会へ行き、様々な活動をするようになった。当時、世界各地で生じるイスラーム過激派によるテロ事件で日本人のイスラーム観は悪い方向に広がるばかりだった。これでは私たちムスリムも同一視され悪者にされてしまう。そのための活動をするためには代々木駅近くに在った日本ムスリム協会の事務所は狭くて不適當だった。

そこで、五反田駅近くの4階建てビルを買うことにした。2億円もする建物を取得するためには資金集めが課題になり、豊かになったアラブの産油国に出かけて行きお願いした。その成果は、

資金集めに協力支援してくれたサウジアラビア政府、世界イスラーム連盟(ラビタ)、アラブ連盟、ドバイの慈善団体(M-charity)のお陰で購入額を取得できた。2020年支援団体の幹部や関係国の外交官を招いて盛大に会館設立記念式典を実施した。施設が広くなったことにより様々な活動ができるようになった。特に三階の礼拝所だけではなく全館を活用して行う金曜日の合同礼拝には多数の多国籍のムスリムがやって来て日本人イマームの説教を聞きながら礼拝できるようになったのは大きな成果だった。近い将来はもっと大きな建物が必要になるだろう。布教活動は地域の人たちとの交流が大切で、町内会の会員になり協力している。例えば、町内会の祭りの時は、協会が行列の通り道になるので休息所としてドイツ(ナツメヤシ)と飲み物を提供し、町民から感謝されている。

理事の数を15名に増やし、活動は多岐にわたっている。



会館開館のテープ・カット(会館玄関前、東五反田、2016年8月8日)



日本イスラーム文化交流会館の開館式典に参加した国内外の来賓

〈日本国内での宗教者対話〉

ムスリム協会は世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会のメンバーであり、様々な会議や行事に参加した。2021年1月26日、WCRP委員会のメンバーと一緒に外務省を訪問、鷲尾・外務副大臣と面談して核兵器禁止条約声明文を渡した。



世界平和実現を目指して、世界の宗教者が集いWCRP日本委員会が実施したイスラーム国際会議(京都、2010年)(提供:WCRP日本委員会)

〈海外の国際会議に参加〉

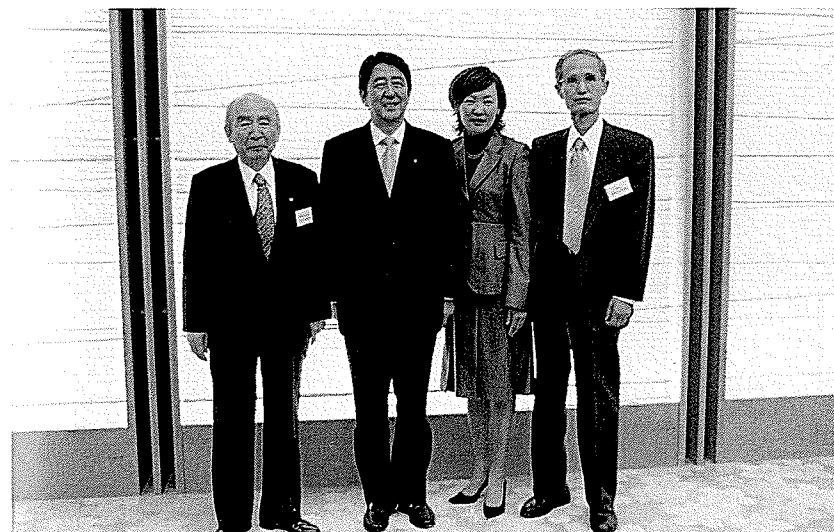
エジプト政府やサウジアラビア政府で毎年のように開催された国際会議に招待されて行った。



国際ムスリム会議にJMA会長、日本代表として参加

〈日本政府主催のイフタールに参加〉

小泉総理が始めた、官邸で行われたイフタール（断食明けの食事）に毎年招待された。



安倍総理ご夫妻と(総理官邸、2006年)

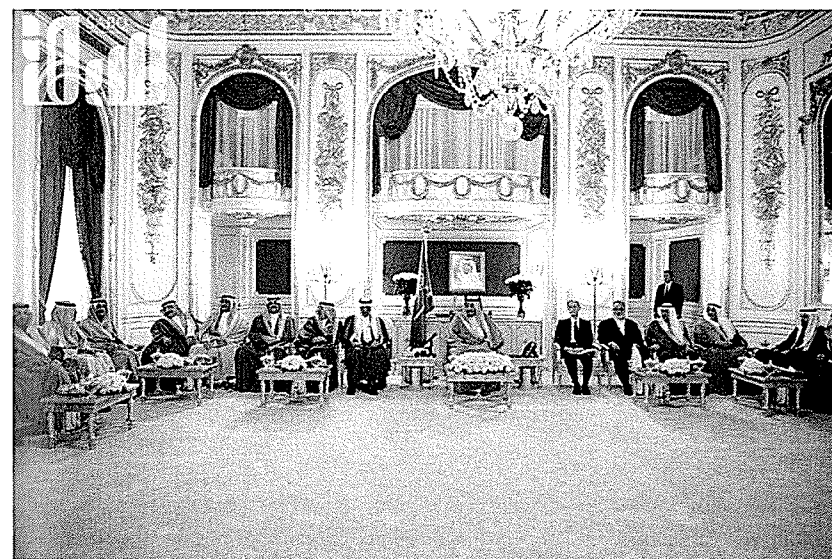
また都知事主催のイスラーム諸国外交官のイフタールに招待された。



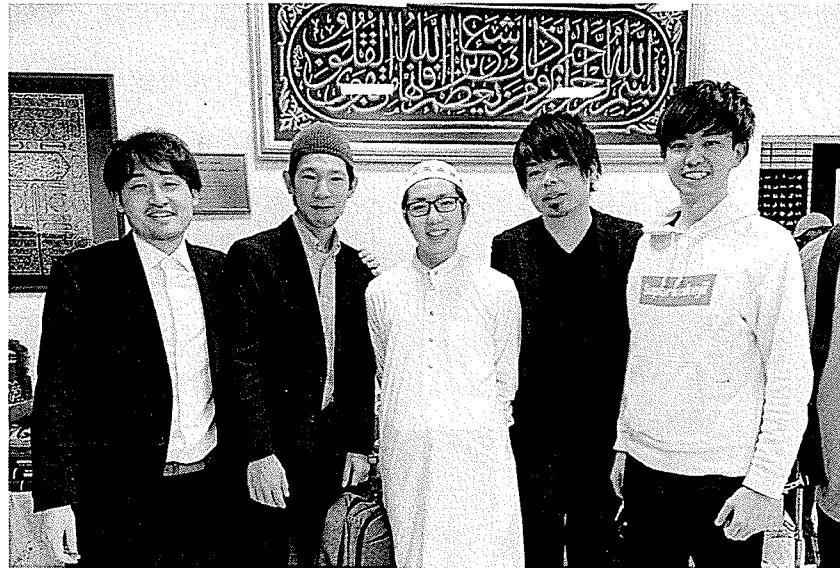
都知事主催のイフタール会。
小池都知事、JMA遠藤会長と(都庁、2023年)

〈サウジアラビア国王に拝謁〉

2017年、サルマーン国王が来日された時、迎賓館で拝謁する機会があった。その際頂いたキスワ（カアバ神殿を覆っている金糸の入った布）は協会の一階に飾った。



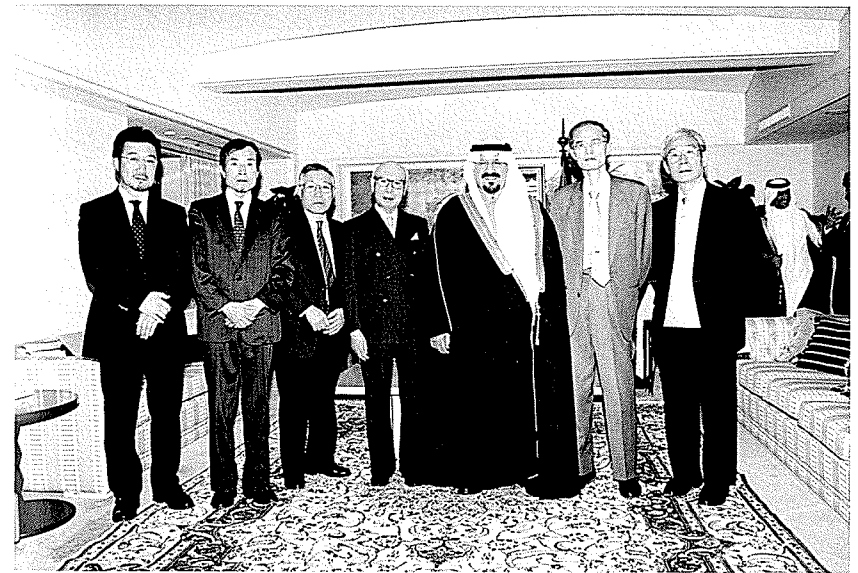
サルマーン国王に拝謁(迎賓館)



キスワを背景にムスリムの青年たち(協会の1階サロン)

〈サウジアラビア皇太子を表敬訪問〉

2006年に来日されたスルターン・皇太子を日本ムスリム協会の幹部が表敬訪問をした。

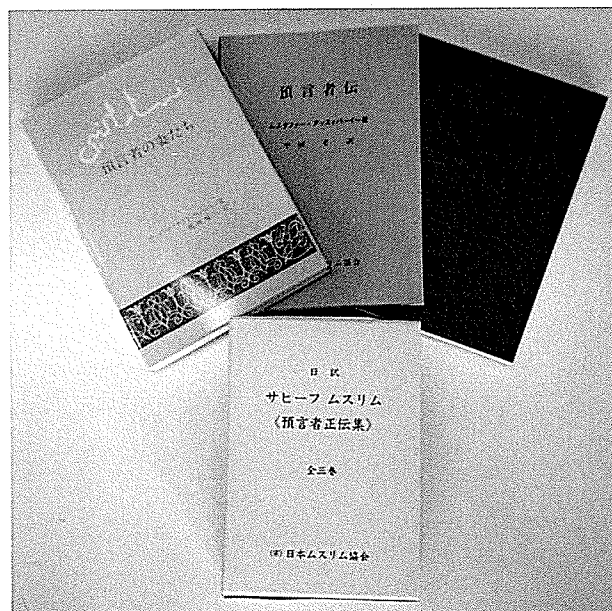


スルターン皇太子を表敬訪問(帝国ホテル)

〈日本サウディアラビア協会、日本クウエイト協会〉

アラビア石油の総務部にいた時、日本サウディアラビア協会、日本クウエイト協会の事務局長も兼務した。両協会の設立は両国との文化交流を通して友好親善の促進を目的にしたものであった。

様々な活動を実施したが特に思い出に残ったのは1982年、日本サウディアラビア協会設立20周年を記念しサウジ政府から50万ドルのお祝金をいただきファハド基金を設立、タフシール・アル・ジャラーライン（ジャラーラインのクルアーン注釈）や日訳サヒーフ・ムスリム〈預言者正伝集〉等を出版し、イスラーム理解に貢献できたことである。



日本サウジアラビア協会がファハド基金で出版した書物